# 帰去来

シン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
帰去来

【Ｎコード】
Ｎ５９３５Ｚ

【作者名】
シン

【あらすじ】
ハロウィンの日、学生時代から嫌いだった厭な男、ビルから『失恋した』という電話がかかって来た。
彼は酒を煽り、時には涙を零しながら、その失恋話を延々と続ける。カボチャや魔女が犇めき合い、お菓子が山と積まれる部屋で。
ハロウィンの今日、ビルはその子と逢う約束をしていたのだ。それなのに、その子は来なかった。
だけどぼくは、ビルの失恋話を笑う気には、なれなかった。
なぜなら……。

## 失恋　？

学生時代から、厭な奴だった。

愛称、ビルは、ニュー・イングランド地方の名家の御曹司で、名門私立高校（レッブスクール）から東部名門八大学（アイビーリーグ）の一校に進学した正真正銘のヤッピーで、地域社会で敬われていた彼は、自らがこの国を動かしている、とさえ思っていたのだ。

ＷＡＳＰ（ワスプ）（Ｗｈｉｔｅ．Ａｎｇｌｏ　Ｓａｘｓｏｎ．Ｐｒｏｔｅｓｔａｎｔ）と呼ばれる彼のような一部の白人が全てそうだ、という訳ではないが、好んで付き合いたい、と思える人種では、なかった。

傲慢で、厭味で、貧乏人など見下し、そのくせ、施（ほどこ）しだけはきっちりと与える。

教会にも通っている。

そういう名家の御曹司としてのスタイルが、彼には生まれながらに染み付いていたのだ。

アメリカの多くの地方では、彼のような名家の御曹司が実力者として慕われるが、このニューヨークではそうは行かない。ここでは、本物の実力者でなければ、相手にされないのだ。

だが、まずいことに、アイビー・リーグで四年間の学部を終了し、大学院で修士号（マスター）まで得た彼は、その本物の実力さえ持ち合わせていた。

ニューヨークで成功したのだ。

それでも、彼を慕う者はいなかった。

結果、彼は、故郷での人々に敬われる生活を望み、地元から自分の言うことを利くイエス・マンを呼び集めた。その取り巻きたちを側に置き、我が物顔で振る舞い始めたのだ。

今では、彼のことを〝ビル〟と親しみを込めて呼ぶ人間は、その取り巻きたちだけになっている。他の者は、彼の正式名、ウィリア

ムで呼び――いや、そのファースト・ネームで呼ばれている分には、まだいい。厭味のセンスを持つ人間なら、彼のラスト・ネームにサーの称号をつけて呼ぶだろう。もちろん、彼がその称号に相応しい人間だ、という意味ではなく、全く別の意味で。

ぼくは、彼をビルと呼ぶ取り巻きの一人だった。

従兄弟である、といえば、まだ体裁がいいが、実際には、大学へ行くために彼の父親に資金を援助してもらった、という、一歩下がらざるを得ない立場である。

ビルもぼくも、互いに今年、三十歳になる。

そんな折り、ビルから一本の電話がかかって来た。――いや、その話をする前に、彼のここ二月間の様子を付け加えて置かなければならないだろう。

## 失恋　？

ビルは、この二月近くの間、屋敷に取り巻きたちを呼び付けることもなく、仕事が終わればすぐにイースト・サイドに構える豪勢な屋敷に戻り、どこにも出歩くことはなかったのだ。

そして、十月三十一日の今日、彼は浴びるほどに酒を飲み、強かに酔った口調で、ぼくに電話をかけて来た。

「失恋したんだ……。すぐに来てくれないか」

行きたくなど、なかった。ハロウィンの今日、ぼくは近所の子供たちにお菓子をあげることを楽しみにしていたのだ。――いや、その後、子供たちに冷やかされながら、彼女と食事に行くことを。

だが、従兄弟ということもあり、彼の父親に恩もあり、加えて、イエスとしか言えない立場の人間であったため、ぼくは渋々、彼の屋敷へと足を運んだ。

失恋していい気味だ、と思うよりも、彼に恋人がいた、ということの方が驚きだった。彼のような傲慢な人間に、どこの誰が付き合っていたのだ、と思ったのだ。

だが、別にそれを聞きたいとは思っていなかった。少なくとも、今日は。

ぼくがビルの屋敷に着いたのは、それから三〇分後のことだった。この狭いマンハッタンで、庭までついている立派な屋敷である。

ビルは、庭に面した大きな窓のある部屋の片隅で、蹲(うずくま)るように、ウイスキーを煽っていた。

部屋には、甘い匂いが充満している。香水、とかそんな気の利いたものの匂いではない。キャンディやチョコレート、クッキー、ケーキ……そんなお菓子の群れの、甘ったるい匂いである。

これから一〇〇人の子供がお菓子をねだりに来るのか、と思えるほどのお菓子の山は、そこら中に飾りつけられたカボチャや魔女の装飾と共に、賑やかな一日を演出している。

だが、その広い部屋の片隅で酒を煽るビルの姿は、空しい、としか言えないものであっただろう。
ぼくはとにかく窓へと向かい、酔いそうになるほどの匂いから逃れるために、大きく窓を開け放った。何しろ、甘ったるいお菓子の匂いと、ビルの煽る酒の匂いがごちゃまぜになっているのだから、気分が悪いこと、この上ない。
庭には、いつもガレージに入れてあるはずの、黒塗りの高級車が出してあった。誰かに磨かせておいたのか、いつも以上にピカピカである。きっと、恋人と出掛けるために用意していたのだろう。
ぼくは、ビルの前に身を屈め、時計を気にする素振りを見せながら、来たことだけを彼に告げた。

## 失恋　？

「可愛い子だったんだ」
ビルは言った。
酒のせいだけでなく、目が赤い。
「庭に車が出してあるだろう？　おれは今日、その車にあの子を乗せてやるつもりだったんだ」
そう言って、ビルは、グイ、っとウイスキーを飲み干し、また、グラスの中へと注ぎながら、取り憑かれたように喋り始めた。
「おれは小さい頃から恵まれていて、一流の生活、一流の教育、一流の身のこなし……何でも不自由なく持っていた。あの車もそうだ。九月の始めに買い替えたばかりなんだよ。――知ってるだろ？　前の車も悪くなかったが、今の車の方がずっと気に入っている。その車に、汚い手で触ろうとしているガキがいたんだ。まだ買い替えたばかりの頃だよ。おれは、仕事の付き合いもあって、鑑(み)たくもない個展に連れ出されていた。それでも、買ったばかりのあの車に乗って出掛けることができて、ちょっと気分が良くなっていたんだ。だが、その気分の良さも、その薄汚いガキのせいで吹き飛んだ。おれはすぐに、
『何をしているんだっ！』
って、そのガキを怒鳴りつけてやったよ。まだ小さい子供なんだ。近くで見ると、思っていたよりもずっと小さくて、何もそんなデカイ声で怒鳴ることはなかったな、って、後悔したんだ。だけど、前にも車に傷をつけられたことがあったから、おれも甘い顔はしなくて――。覚えているだろう？　白のベンツに乗っていた時だ」
「ああ」
ぼくが応えると、ビルはまたウイスキーを、グイ、っと煽り、息苦しそうに噎せ返った。
多分、ぼくが腕の時計を垣間見たことにも気づいていなかっただ

ろう。
「おれは、そのガキもてっきり車にイタズラをしに来たんだと思って、優しい言葉で追い払うこともせず、思いっきりきつい視線で睨みつけてやったんだ。小さな子供といっても、この街じゃあ、そんな子供がマリファナやコカインをやってることなんて珍しくもないからな。――だけど、そのガキは、おれが睨みつけるのを見ても逃げもせず、へへェ、と頭を掻いて笑ったんだ。こいつは脳みそが足りないんじゃないか、って思ったよ。おれが子供の頃なんか、大の大人に上から睨みつけられたら、怖くなって走って逃げたさ。最近のガキは、そんなことじゃ逃げないんだ。それどころか、
『このくるま、ぴかぴかだね。すごくきれいだね』
って、でっかい目をキラキラさせて言うんだ。ハッ、とするほどに可愛い顔をしてさ。アクアマリン、ってあるだろ？　その宝石みたいにきれいなブルーの瞳で、髪は眩しいくらいの赤毛で――。ああ、この子はきっと、大きくなったら金髪になるんだろうな、って思ったよ」
そこまで言って、ビルは思い出すように瞳を閉じ、しばらく自分の時間に浸っていた。

## 失恋　？

ぼくは、といえば、帰ってしまう訳にも行かず、仕方なく冷蔵庫から氷を取り出し、水割りを作って飲み始めた。話がすぐには終わりそうにない、と諦めたのだ。

「そのガキはさァ……」

と、ビルがまた話を始める。

「そのガキは、とんでもない馬鹿なんだよ。人に怒られてる、ってことが解っていないんだ。普通なら、車の持ち主が戻って来た地点で、ああ、自分はもうこの車から離れなくちゃならないんだな、って判断するだろ？　だけど、そのガキは離れないんだ。汚い手でベタベタ触ろうものなら、また怒鳴りつけて追い払ってやろうと思ったけど、触りもせずに、ただ眺めているだけなんだ。――で、おれも無下に追い払うことも出来なくて、さっき怒鳴りつけたことも、何だか酷く悪いことをしたような気がして――いや、本当は悪いなんてこれっぽっちも思っていなかったかも知れないけど、とにかく、おれが悪者になるのは厭だったから、

『車が好きなのか？』

って、聞きたくもないことを訊いてやったんだよ。そうしたら、とびきりの笑顔でうなずくんだ。でも、その後すぐに、照れるようにはにかんで、本当は、こんな凄い車を見るのは初めてで、珍しくて見ていた、って言うんだ。そんなこと言われなくても、おれには最初から解っていたさ。薄汚れた、見窄らしい浮浪児みたいなガキが、黒塗りの高級車になんか乗ったことがあるはずないんだからさ。もちろん、近くで見たことだってないだろう。おれは心の底から、そのガキを馬鹿にしたよ。バワリーにいる貧困層の白人の子だろう、と。このまま大きくなったって、学校にも行かず、ドラッグに溺れて、ギャングか麻薬中毒者（ジャンキー）になるだけの子供なんだ。人間のクズだよ」

吐き捨てるように言っておきながら、ビルは、こぶしが白くなるほどに、きつく指を結んでいた。

## 失恋　？

いつになったら本題に入るのだろう、と、ぼくは時計を気にしていたが、ビルはそんなことなどお構いなしで、話を続ける。

「おれは、一向に車の側から離れないガキに、いい加減、腹が立って来てさ。車のことを褒めてもらった、っていっても、そんなガキに褒められたって嬉しくもないだろう？　だから、

『年はいくつなんだ？　家に帰らなきゃ両親が心配するだろう』

って訊いてやったんだ。もちろん、心配してくれるような良い両親がいるなんて思っていなかったさ。応えられないことを訊いてやれば、そのガキもきっと帰るだろう、と思ったんだ。そうしたら、そのガキも寂しそうな顔をして、それでも一応、笑って、やっと車の側から立ち上がったんだ。その時、初めて靴が見えたよ。サイズの合っていない汚い靴なんだ。きっとどこかで拾って来た靴なんだよ。だからおれは、そのガキはおれに金をねだるつもりで、車の側で待っていたんだ、って思ったんだ。

『ギブ・ミー・ニッケル（５¢（ニッケル）ちょうだい）』　ってさ。よくいるだろ？　でも、そのガキは金をねだらずに、

『五つ』

とだけ応えたんだ。だけど、立ててる指は四本で。どうやら、この間、五つになったばかりらしくて、指の本数を間違えているんだ。そのガキはまた頭を掻いて、恥ずかしそうに笑って、すぐに五本目の指を立てたよ。本当に馬鹿なガキなんだ。数もロクに数えられないんだぜ。だから、おれは言ってやったよ。

『おまえがこの車を買うには、少なくとも後一万年はかかるな』

って――。普通なら、小さいガキにそんなことなんか言わないだろ？　言っても、冗談めかして言うだけだ。――でも、おれは言ったよ。そうでも言わなけりゃ解らない阿呆だったんだ」

このままいつまで付き合わされるんだろう、と思いながら、ぼく

はもう時計を見ることもせず、彼女との約束の時間まで、ビルの話に付き合うことにした。

## 失恋　？

「おれがそう言ったら、そのガキはどうしたと思う？　また照れるように笑ったんだ。人の厭味なんて、全く堪えていないんだよ。だから、おれもそれ以上付き合ってる気もしなくて、車に乗ることにしたんだ。でも、運転席のドアのところにそのガキがいてさ。

『危ないから退いてろ』

って言って、そのガキを脇へ下がらせたんだ。ちょっと押して下がらせただけなんだぜ。――いや、面倒臭くて、少し力が入っていたかも知れないけど――。そのガキが、コテン、と転んだんだ。呆気ないほど、簡単に――。押した時に判ったんだけど、惨めなくらいに痩せてるんだよ。ロクなものを食べていないんだ。悪いことをしたな、って思ったよ。そのガキが自分から車の側を離れるまで待っててやれば良かった、って。そう思ったけど、それ以上に、そんな小さい子供を突き飛ばしたことに焦って――他人の目を気にしていたんだ。そのガキが泣き出さなくて良かった、とか、すぐ近くに人がいなくて良かった、とか思って、ホッとしたんだ。それで、人が来ない内に、そのガキに手を貸して起こしてやって。そうしたら、

『ころんじゃった』

って、まるで自分の失敗みたいに、恥ずかしそうに言うんだ。おれが突き飛ばしたせいで転んだ、っていうのにさ。おれ……自分が恥ずかしかったよ。だから、

『家の人が心配しないのなら、何か食べてから帰るかい？』

って訊いてやったんだ。――いや、それもいつも通りの貧困者への施しのつもりだったかも知れない。それに、そのガキは気づいていなかったけど、ヒジから血が出ていたんだ。転んだ時に怪我をしたんだよ。でも、そのガキは泣いていなくてさ。痛いとも言わないんだ。おれは心の中で、こいつは正真正銘の馬鹿だから神経も通ってないんだな、って思ったけど、そのガキを不憫に思っているおれ

もいて、そのガキが、コクン、とうなずいたから、何か食べさせてやることにしたんだ。でも、その汚いガキを連れてレストランに入る気がしなくてさ。ホットドック・スタンドで、ホットドックとジュースを買ってやったんだ。もちろん、ヒジの傷もハンカチを濡らしてきれいにしてやった。ドラッグ・ストアで絆創膏を買って、その傷口に貼ってやったんだ。――そのガキが家に帰って、おれに怪我をさせられた、って言ったら厭だろ？　本当は、そんなことを親に言い付けるようなガキじゃないんだけど、おれは貧乏人はみんな小賢しいと思っていたからさ。そいつが、そんなことを考える脳のない馬鹿なガキでも、親に言い付けられないように、って文句のつけようがないくらい親切にしてやったんだ。そして……その子がホットドックを食べている間において帰った。もちろん、

『もう帰るから、後は一人で大丈夫だね？』

と訊いてやったさ。そのガキも、

『うん』

とうなずいた。だから家に帰ったんだ。それで――」

そこまで言って、ビルは涙を堪えるように、唇を結んだ。

ぼくにも、彼が泣くまいとしていることが判ったので、少し一人にしてやろう、と思って、冷蔵庫に氷を取りに行った。

## 失恋　？

カラン、カラン、と氷を入れる音を立てると、背中の方から、ズズっ、と鼻を啜り上げる音が聞こえて来た。
ビルの方もストレートでは体に悪いだろう、と思ったけど、無理に水割りに変えさせようとは思わなかった。今の彼には酒が必要なのだ。――といっても、肝心の失恋の話は、まだ聞いていないけど。

「次の日、またそのガキに逢ったんだよ」
ぼくが戻ると、ビルは赤い目を隠すようにしながら、そう言った。
「おれの家の前で、キョロキョロしてるんだ。マズイことをしたな、って思ったよ。昨日親切にしてやったから、味をしめてまたタカリに来たんだ、と思ってさ。早くどこかへ行ってくれないかな、って思いながら、ブラインドの隙間から覗いていたんだ。でも、一向に帰る様子がなくてさ。三時間も同じ場所を行ったり来たりしているんだ。時々、門の前で立ち止まっては、自分の手のひらを眺めたりしてさ」
「手のひら？」
ぼくは、初めてビルの言葉に問い返した。
「ああ。――いや、本当は手のひらじゃないんだ。その小さい手に何かをもっているんだよ。後で判ったんだけど、それはおれの免許証でさ。それを届けに来てくれたんだ。それなのにおれは、そんな小さい子を三時間も外に放っておいて、早くいなくなって欲しい、ってブラインドの陰から眺めていたんだ。やっと家に入れてやったのは、あんまり腹が立って、追い払ってやろうと思った時さ。ズンズンと足を踏み鳴らして、思いっきり目を吊り上げて外に出て行ったんだ。そうしたら、そのガキは嬉しそうにおれを見上げて、

『これ』

って、その免許証を差し出して言うんだ。あの車を運転するのに必要なものだ、って解ってるんだよ。――いや、ホットドック・スタンドのおやじからそう聞いた、と言っていた。あのガキは字が読めないんだよ。まあ、まだ五つだからな。それで、そのおやじに読んでもらって、あの脳みその足りない馬鹿な頭で、おれの家の住所を一生懸命、覚えたんだ。きっと、あいつの頭だから、何回も繰り返し聞かなきゃ、ここの住所なんか覚えられなかったはずなんだ。字が読めないんだから、頭で覚えるしかないだろ？　あのガキも偉いが、あのガキに繰り返し住所を読んでやったホットドック・スタンドのおやじも偉いよ。――そう思うだろ？　とにかくおれは、免許証を受け取って、そのままガキを帰す訳にも行かなくて、家に入れてやったんだ。

## 失恋　？

『ジュースでも飲むか？』

ってな。何しろ、三時間も待っていたんだからな。あのガキも一言声をかければいいのに、黙ってうろついてるものだから、おれだって何の用があるのか判らなかったんだ。でも、考えてみれば、門についているインターホンは、あの子の身長じゃ届かないんだよ。ドアをノックして声をかけるには、門をくぐらなきゃいけない。あの子はずっと、それで悩んでいたんだ。あのちっこい脳みそで――。おれは何だかその子のことが無償に愛らしくなって、ジュースだけじゃなく、クッキーやチョコレートも出してやったんだ。来客用の高いやつだよ。あの子は瞬きすら忘れてそれを見ていたさ。――おれがお菓子を出してやるまでの間も、キョロキョロと部屋の中を見回して、

『すごいおうちだね。これ、ぜんぶ、ひとつのおうちなの？』

って、何度も訊くんだ。それから、自分の汚い服と見比べて、恥ずかしそうにうつむいてさ。解ってるんだよ。自分が貧乏人で、こんな家には相応しくない人間なんだってことが。あの子は、おれが思ってるほど、馬鹿な子供じゃなかったんだ。身分違いを思い知らされた上に、きれいなグラスに入ったジュースや、ピカピカの皿に並べられた高級なクッキーやチョコレートが出て来たものだから、どうしていいのか解らなくなってたんだよ。――その様子を見ながら、おれが何を考えていたか解るか？　おれは貧乏人の子に生まれなくて良かった、って考えてたんだよ。だって、そうだろ？　他人の家に招かれて、マナーも知らないんじゃ、恥をかくだけだ。だけど、貧乏人の子に生まれたら、こんな家に招待される機会もないんだよな。何が恥なのかも、きっと一生知らないままなんだ。その子も、目の前に並ぶジュースやお菓子を見て、これ食べてもいいのかな、って顔で、悩んでるんだ。おれとお菓子を交互に見つめてさ。

おれが一つうなずいてやると、その子は両手でお菓子をつかんで食べ始めたよ。ジュースは手を使わないんだ。ストローが差してあったからさ。クッキーを食べては、そのストローのところまで口を持って行って、吸い付くんだ。口の中のお菓子をまだ全部飲み込んでもいないのに、両手にはもう次のお菓子を持っている。あんまり浅ましくて、みっともなくて、惨めで、汚くて、下品で……いつもなら眉を顰めるんだけど、おれ……その子が可哀想で、可哀想で……顔を背けることしか出来なかったんだ。可愛い子なんだよ。素直で、優しくて……。それなのに、何でそんな汚い格好をして、おなかを空かせてなきゃならないんだ、って……。おれ、その子にもっと何かをしてやりたくなって……」

ここで、ぼくもビルから視線を逸らすことになった。ビルの目から、ぽろぽろと大きな涙が零れたのだ。

もちろん、ビルが、その子のことを、ガキと呼ばなくなったことにも気づいていた。

## 失恋　？

「おれ……昨日、その子に貼ってやった絆創膏が汚れているのを見て、新しいのに替えてやらなきゃ、って思ったんだ。――信じられるか？　その子の母親だって、その絆創膏には気づいたはずなんだ。それなのに、絆創膏を替えてやってもいないんだよ。普通、風呂に入ったら駄目になるだろう？　風呂に入れてもらっていないんだよ。だからおれは、その子を風呂に入れてやろうと思って、その子がお菓子を食べ終わるのを待って、そう言ったんだ。途中でお菓子を取り上げたら可哀想だろ？　だから、最後まで食べ終わるのを待って――。そうしたら、その子、何て言ったと思う？

『ごめんね。きたない？』

って、恥ずかしそうに、おれに訊くんだ。――おれはどう応えてやれば良かったんだ？　何て言ってやれば良かったんだ？　おれが苦笑いをすると、その子は自分で服を脱ぎ始めたよ。不器用でさ。ボタンもうまく外せなきゃ、袖もうまく抜けないんだ。――でも、そんなことは関係ない。その子は、おれに憫(あわ)れみを受けている、って知りながら、それを屈辱とも思わずに、汚い格好でいちゃいけない、と思って、素直に風呂に入ると言ったんだ。強い子なんだよ……。おれは、服を脱ぐのを手伝ってやろうと思ったけど、ついに最後まで手が出せなかった。それが悔しくて、情けなくて……。だから、風呂では必ず、体を洗うのを手伝ってやろう、って決めて、汚れた服を洗濯機に放り込んで、その子を風呂に入れてやったんだ。その子は、バス・ルームでも珍しそうにキョロキョロとしていたよ。これが風呂だとは信じられない、って顔でさ。おれは優越感を感じたよ。その子が珍しそうに辺りを見回し、おれに何かを言う度に、優越感を感じていたんだ。そんな小さい子供を相手に……。だから、おれ、その自分の心をごまかすために、その子に話しかけてやった。おれは優しい善人なんだ、って顔でさ。

『家では、いつもお母さんと一緒に入るのかい？』
って。そうしたらその子は困ったように曖昧に笑って、ただ首を横に振ったよ。家族のことは話したがらないんだ。おれとは大違いだよ。おれは小さい頃から両親が自慢で、家柄が自慢で、その話をするのが嫌だ、って思ったことなんか一度もなかった。――でも、その子は母親を嫌っていた訳じゃないんだ。母親をかばっていたんだ。おれに悪口を言われないように――。小さくても、男は男なんだよな。ちゃんと女をかばうんだ……」
一呼吸おき、ビルはウイスキーを喉に流し込んだ。その手の中には、涙を拭いたハンカチがある。

## 失恋　？

「おれは、『また遊びにおいで』ってその子に言ってやったよ。その子は嬉しそうにうなずいて、休日や夜に遊びに来るようになったんだ」

「夜？」

「ああ。あの子の母親は、そんな時間に子供が出歩いていても何も言わないんだよ。普通、まだやっと五つの子供が、他所の家でお菓子をもらって、風呂にまで入れてもらって、洗濯したての服を着て帰って来たら、変だと思うだろう？　子供を問い詰めて、おれのことを訊き出すはずだ。常識がある親なら、礼の一つか、文句の一つを言いに来る。――いや、別に礼や文句を言って欲しくてやった訳じゃないけどさ。子供が夜、どこに行っているのか心配になって、様子を見に来るくらい、親なら当然のことだろう？　だけど、来ないんだよ。何日経っても、親は一向に顔を見せない。おかしいと思ったよ。その子は親に捨てられて、行く場所がなくて、おれのところへ来ているんじゃないか、って――。別におれはそれでも良かったんだ。アル中の父親や、ヒステリックな母親がいるくらいなら、みなしごの方がずっといい。おれは、その子がみなしごなら、引き取って面倒を見てやってもいいと思っていたんだ。本当に可愛い子なんだよ。――それで、おれはその子の後をつけて、両親のことを確かめてみようと思ったんだ。いつも、その子は、

『ひとりで、かえれる』

って言って、タカタカと地下鉄の駅の方へと歩いて行くから、おれはその子がどこに住んでいるのかも知らなかったんだ」

そう言って、ビルは、グイ、っとグラスを傾けた。が、中が空であったために、ボトルからウイスキーを注ぎ直し、もう一度グラスを傾けた。それから、少し重く目を瞑り、

「その子、どこに住んでいたと思う？」

と、ぼくに訊いた。
「さあ……」
「おれには信じられなかったよ。その子は売春宿に入って行ったんだ」
「売春宿？」
その言葉には、ぼくも、驚いた。

## 失恋　??

「ああ。母親が娼婦なんだよ。だから、夜、客を取っている間は、その子が何をしていてもわからないんだ。知らない男のところへ出掛けていても――。父親なんか、もちろんいないさ。――いや、いても誰が父親なのか判らない。いるのは、ガラの悪いヒモだけさ。おれは悔しくて、悔しくて……。何でその子の母親が娼婦なんだ、って。その子はもっと幸せになってもいい子だろう、って――。母親に逢ってみようと思ったよ。子供を育てる気がないのなら、おれがその子を育ててやる、って。そう言おうと思ったんだ。でも、その日は逢えなかった。たとえ娼婦でも、その子が母親のことを慕っているのなら、おれが口を出すことじゃないだろう？――　いや、本当は、そんなことを言いに行く勇気がなかっただけかも知れない。乱暴なヒモや、売春業者が出て来たら、殴り倒されるかも知れないんだ。怖くて当然だろ？　誰だって、そんなことになんか関わりたくもない。――でも、何日か経って、その子が青アザを作って、おれの家に来たんだ。顔じゃないんだ。服に隠れて見えない場所なんだよ。そのアザを偶然見つけて――。今までにもきっと、そういうことがあったはずなんだ。おれが気づかなかっただけで、その子は母親のヒモに殴られていたに違いないんだ。――おれは、その子の母親に逢いに行ったよ。薄汚い売春宿に。その子がいないのを確かめてから――。どんな女が出て来たと思う？　おれは、あの子の母親だから、すごい美人に違いない、って思ってたんだ。流れるような金髪と、ガラス細工のような青い瞳をした――。それが、出て来た女は、病人みたいに青白い顔をした、少しも冴えない女なんだ。これっぽっちも美人じゃなくて、くたびれ切っていて。まだ二十代か三十代のはずなんだけど、窶れ切った老婆みたいな雰囲気の……。ふざけるなっ、て叫びそうになったよ。子供が憧れるくらいきれいな母親なら、あの子にもそれは自慢になるだろうと思っていたんだ。

それが……それが、あんな女が母親で……。おれはとてつもなく腹が立って……体中が震え出したよ。あの子の母親は、こんな女じゃない。おれはこんな女に頼むべきじゃない。そう心の中で繰り返していた。だから、何も言う気にならなかったんだ。――解るだろう？　おれがその女に文句を言ったら、その女があの子の母親だ、って認めたことになるんだ。おれにはどうしても、その女があの子の母親だと認めてやることは出来なかった。――もし、その女がもっとケバくて、派手で、子供と正反対の贅沢な格好をしていれば、おれはその場でケンカを始めていたさ。殴り倒してでもあの子を攫って行った。その女だって、喜んでおれにあの子を渡したはずなんだ。だけど、そうじゃなかったんだ……。年中、ヒモに金をせびられて、生気も何も残っていないような無気力な女だったんだ……」

そう言って、ビルはその日を思い起こすように、こぶしを握った。

## 失恋　???

「おれは、その母親のことが憎らしくて、憎らしくて、その日から、仕事もロクに手がつかなくなったよ。人と話をしていても、いつの間にかその女のことを考えて、上の空になっているんだ。そして、ついに仕事に支障を来した。――覚えているだろう？　先方が怒って帰った日のことだ」

「ああ」

「おれは、全てをぶち壊したい気分になっていた。何で、あんな女のために、自分まで仕事でしくじらなけりゃならないんだ、って――。その日の夜も、あの子が来たよ。門はいつも、押せば開くようにしてあったんだ。それで、あの子はあの窓から――庭に面したその窓から、ひょこ、っと顔を出して、また来ちゃった、みたいな顔をして、照れながらおれを見ているんだ。だけど、おれはその子の相手をしてやる気分じゃなくて、その子が来たことには気づいていたけど、気づかないフリをして、ずっと無視を続けていたんだ。あの子は、戸惑うような顔をしていたよ。それでも帰りもせずに、おれが窓を開けるのを、じっと待っているんだ。窓を叩きもせずに、じっと――。車に触らなかったのと同じように、どんなに触りたくても我慢をするんだよ。あの母親との生活で、我慢をすることを覚えているんだ。おれはまた悔しくなって……。何で、その子はあんな母親の言うことを素直に利くんだ、って……。自分だけいい子ヅラして、そんなに気分がいいのか、って――。外が寒くなって来たから、仕方なく家に入れてやったよ。でも、いつもみたいにジュースやお菓子を出してやる気にはならなかった。――だって、そうだろ？　おれがこんなに優しくしてやってるのに、その子は母親の方がいいんだ。何もしてくれない母親の方が――。そう思うとやり切れなかったんだよ。おれの方が、その子に好かれて当然なんだ。その子の方から、おれとずっと一緒にいたい、と言うのが当然なんだ。

それなのに……その子は、そんなことなんか一言も言わないんだよ。こんな家に住みたい、とも、おれみたいに何でも持っている人間になりたい、とも……。あの子に取って、ここは時間潰しの場所でしかないんだ。母親に言われた通り、客がいる間はどこかで時間を潰して来て、また母親の元に戻って行くんだ。おれは、口も利いてやらなかったよ。おれから何か言うのは腹が立ったんだ。その子は居心地悪そうに、ちょこんと椅子に座っていたさ。帰るに帰れない状況なんだ。おれはまた、何て馬鹿なガキなんだ、って思ったよ。居心地が悪けりゃ、帰ればいいんだ。おれを悪者にしてしまえばいいことなんだよ。それが出来ないのなら、

『ここにいると迷惑？』

とか訊けばいいんだ。そうしたらおれは、

『ここにいたいのか？』

って訊いてやるさ。それなのに……一時間も黙って座ってるんだ。おれは頭に来て、飲んでいたウイスキーを、その子にも注いで渡してやったよ。

## 失恋　??

『娼婦の子なんだから、酒くらい飲めるだろう』

って――。その子はビックリしたような顔をして、それから、困ったような顔をして、おれが差し出したグラスを受け取ったよ。飲めなきゃ置いておけばいいのに、匂いだけで酔いそうなそのグラスに口をつけるんだ。でも、やっぱり飲めないらしくて、舌をつけただけで眉を落として……。やっぱりおれが悪者じゃないかっ、て、口に出して叫びそうになったよ。――そうだろ？　その子は、苛められても黙っているんだ。飲めもしない酒を渡されても、じっと黙って堪えているんだ。――何故そうまでしてここにいなきゃならないんだよ？　さっさと母親のところへ帰ればいいじゃないか。おれはその子を侮辱したんだぞ。娼婦の子呼ばわりして、傷つけたんだ。それなのに、何でそんなことを言った男の言葉通り、素直にウイスキーに口をつけなきゃならないんだ？　貧乏人はそこまでプライドがないのか？」

ビルの声は、だんだん高くなっていた。

ぼくは少し困りながらビルを宥め、彼のグラスに、氷を二つ、入れてやった。

「……すまない」

ビルはそう言って、氷の入ったウイスキーを傾け、声を落として再び話しを始めた。

「おれはその子のことを、ずっと、頭の足りない常識のない子供だと思っていたよ。だけど、大人の中にさえ、あの子ほど利口で、人の気持ちの解る人間はいやしない。万聖節に帰り損ねた妖精のような子なんだ。笑っていても、傷ついていない訳じゃない。母親が客を取っている間、あの子はずっと外に出されていて、行き場もなかったんだ。やっと安心して過ごせる場所を見つけた、っていうのに、その家でも飲めない酒を渡されて、辛く当たられて……それでも、

あの子は帰ることが出来ないんだ。おれは、自分がどんなに酷いことをしたか、解っていた。だから、その子にいつも通り、ジュースとお菓子を出してやったんだ。自分のしたことを忘れさせようとしたんだよ。さっきの仕打ちはなかったことにしてほしい、と……。酷いだろ？　お菓子は少なめにして、冷蔵庫にあったグラタンを暖めてやった。あの子は、そのグラタンをおいしそうに食べるんだ。

『熱いから気をつけろよ』

って言ってやったのに、二、三度フーフーしただけで、もう大丈夫だと思って口に入れて――。食べたことがないんだよ。グラタンみたいな有り触れた料理でさえ。あの子は、あまりの熱さに目を白黒させて……おれと目が合うと、へへェ、と笑ってみせて……。何だか、涙が零れ落ちそうになったよ」

そういうビルの瞳には、また、大粒の涙が浮かんでいた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5935z/

帰去来

2011年12月29日14時45分発行